J-16

増田蔵内通り
Masuda In-Warehouse-Street

○宇津里緒菜[1], 渡邊康介[1], 横畑佑樹[1], 永冨快[2], 黄起範[2], 佐藤信治[3]
*Riona Utsu[1], Kenske Watanabe[1], Yuki Yokohata[1], Kai Nagatomi[2], Rhino Hwang[2], Shinji Sato[3]

Masuda Town is located in the southeastern part of the Yokote Basin, and it is at the confluence point of Naruse River and Minase River in the Tributary river tributary. Morning market of Masuda, which is said to have commenced in 1643 when the commercial activities have been thriving since the Edo period, is a traditional morning market that has continued to the present. Many Masuda traders flourished as a major producing area of leaf tobacco and raw silk, and these were the main products, Masuda was crowded as a distribution point of supplies. The Masuda merchant built a symbol of its success as built-in (it is called a built-in because it is a heavy snowfall area because it is a heavy snowy zone and covered a sheath called a sheath to protect it from snow), just a warehouse Not a luxurious glazed built-in was made. These warehouses were changed in the way they were used by the times, used as a place of living in the Meiji era, and in recent years they were used as a warehouse. Recently the value of these built - in has been recognized, and working on local area for tourism use. We propose street galleries to such Masuda area and induce encounters between local residents and tourists, thereby promoting further sightseeing and preserving built-in by transferring technology.

1.　はじめに

増田町は横手盆地の南東部に位置し,雄物川支流の成瀬川と皆瀬川の合流点にある.江戸時代以降商業活動が盛んになり,1643 年に始まったとされる増田の朝市は現在に至るまで続いている伝統ある朝市である.葉タバコや生糸の一大産地として栄え,増田商人の多くはこれらを主力商品とし,増田は物資の集散地としてにぎわった.増田商人は内蔵（豪雪地帯であるため蔵を雪から守るために鞘と呼ばれる覆いをかけて主屋と蔵を繋いだため内蔵と呼ばれる）をその成功の象徴として建てるようになり,ただの倉庫ではない豪華絢爛な内蔵が作られた.それらの蔵は時代によって使われ方を変え,明治には生活の場として使われ,近年はただの倉庫として使用されていた.最近になってそれら内蔵の価値が認識され,観光利用のため地域を挙げて取り組んでいる.そんな増田地区にストリートギャラリーを提案し,地域住民と観光客の出会いを誘発することでさらなる観光の促進と技術の伝承による内蔵の保存を行う.

2.　計画背景

対象敷地である秋田県横手市増田地区は,2013 年に重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝建と呼称）と,景観重点地区に指定された歴史的な街並みの残る町である.重伝建は,メインストリートを中心として江戸時代の繁栄期から発展した商家の街並みが広がっている.また,繁栄期当時の街並みを再現するための修景(Figure.1)が進んでおり,地域の店舗数も増加し観光地として整い始めている.修景が進む表通りから一歩家屋に入ると,豪華

Figure.1 Landscaping

を尽くした内蔵が現れる.これら内蔵の価値は近年認識され始めた.増田地区はこの内蔵を主軸に地域の魅力の観光活用に力を入れている.増田の蔵の観光活用は解体間近の内蔵を個人が買い取り博物館・飲食店として営業し始めたことに始まる.さらに「写真集増田」の発行により増田の住民は今までただの倉庫としてしか機能していなかった内蔵の観光活用を始めた.内蔵の所有者たちは「蔵の会」を発足し年に数回内蔵の一斉公開をするなど,住民主体で内蔵の保存・観光活用の活動が行われて来た.現在その活動は地域へと広がり,町全体で継承する動きが進んでいる.しかし実際に増田を訪れた観光客への調査によると増田の内蔵を 2,3 軒回っただけで他の観光地へと向かってしまう傾向が多くみられた.近年増田は蔵を活用した新たな活動(Figure.2)に取り組んでおり,H29 年にはポケモン GO の前身となるアプリケーション「Ingress」とのコラボイベントや内蔵の内部を展示室とした企画展などを行っている.これらの取り組みにより観光客数はますます伸びていくと思われる.横手市の統

１：日大理工・学部・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
２：日大理工・院(前)・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
３：日大理工・教員・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.

Figure.2 New initiatives

計によると重伝建に指定された H25 年以前と比べて観光客数は約 3 倍にまで増加している.しかしそれと同時に増加する観光客への対応が問題となっている.また,増田の内蔵には高度な技術が施されている.これらの補修などのために高度な技術を持った職人が必要とされているが,全国的に大工人口は 1980 年から約 56%減少しており,左官人口も約 75%減少しているため技術の継承が困難になっており,職人の後継者不足が問題となっている.以上から増田の観光業が生活を維持しながら発展するには住民・観光客双方にとって自発的に学べる場が必要であると考えられる.

3.　基本計画

朝市通りから蔵しっくロード方向へ抜ける土地を対象敷地とし,そこにストリートギャラリーを提案する.本提案は「自発的に学ぶ道」「これからの増田を記憶していく道」「活動を蓄える道」(Figure.3)として住民・観光客・将来の職人を結ぶ道となる.自発的学習の仕掛けとして複雑な商家の構成を細分化し,それぞれを体験することで実際の商家をさらによく理解しながら回れる予習の場として計画す
る.

Figure.3 A way to learn voluntarily

4.　建築計画

計画地は現在車庫になっており,メインストリートの中心として景観にふさわしくない.そこで通りの景観を守るように高さを朝市通りの門に合わせて通りの導入として計画する.敷地は短冊状であり,採光のため南側に通りを作る.そして,その通りから奥へと人が引き込まれるたまり場として二つの蔵を設計する.これらは内蔵と外蔵の関係になぞらえて活動の中心の場,それらの活動が蓄積される場として機能する.次に活動を包むアーケードを鞘として作る.その内部では交流を生む稼働的な家具としてのストリートファニチャーが制作・保管され,それらが移動することで各通りを連結する空間が生まれる.制作したストリートファニチャーや地域の料理など活動の蓄積の場として外蔵がある.持ち寄り食堂としてのカフェバーと制作物のギャラリーとして機能する外蔵は雪室の機能を有しており,食材の貯蔵による地域ブランド化と裏通りから蔵しっくロードへの演出として活用する.地域住民と観光客の出会いが再び増田を訪れるきっかけとなり,「過去を継承しつつ未来へと進む増田の道」となる.

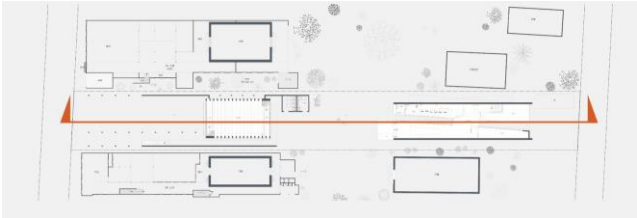

Figure.4 Plan view

Figure.5 Sectional view

Figure.6 Sectional Function Diagram

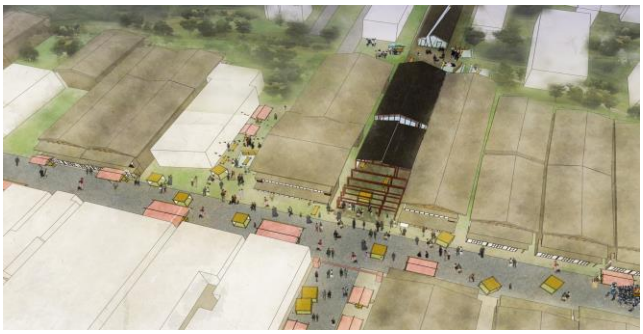

Figure.7 Completed projection drawing